



ミサ参加単独デビュー



やまもと まこと 山元 眞 神父

五歳ともなれば、一人で祭壇の前の子どもの席にやってくる。よく見れば、三歳の子も四歳の子もいる。親と離れてデビューした時はみんなに紹介する。まだ字が読めないのに歌集を拡げ、『聖書と典礼』のパンフレットを開いて読む(真似をする?)。一時間以上もかかるミサの間、おとなしくしている(時にはおしゃべりもするが……)。何を祈っているのかは分からないが、この子たちは、確かに祈っている。

復活徹夜祭には、さすがにこのような幼児は見当たらないが、二時間以上かかる長い典礼の間、小学生でも静かに「祈って」いる。にらみをきかせる大人がそばにいても、強制でもない。かれらは

自由に、自然に……そうしている。

とりたてて「鍛えた」わけでもない。おそらく聖堂全体を包んでいる祈りの雰囲気、かれらをそうさせているのだろう。

「泣き部屋」と呼ばれる母子専用の? 部屋が聖堂にあるのをよく見る。「母子室」とか「アンナ室」とか呼び方はいろいろあるが、結局は「隔離部屋」である。少しはミサの様子が見えるようになっていたり、音はスピーカーを通して聞こえるようにはなっているが、本音は、子どもはうるさくて祈りの邪魔になると思つて隔離しているだけだ。そのようなスペースは「みんなで祈る」ために実は邪魔になっている。ガラス越しでは雰囲気は伝わってこないし、電気ひだの音は心の襞に触れるこ

とはできない。

「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨さまたげてはならない」とイエスは言つた(マルコ10・14)。子どもは神とながつているのに、大人がそれを邪魔しているのではないか……。そうだとすれば、イエスが弟子たちに対して憤つたように、わたしたちもこつぴどく叱られるのではないだろうか。

わたしたちは子どものことが分かっているようで、実はまだまだ分かっていない。確かに未熟には見える。言葉も充分しゃべれないし、理解できない。表現もまだ不充分。しかし、子どもをばかにしてはいけない。子どもたちは、自分がどこから来てどこに行くのか、だれが自分のことをいちばん知っているの

か、どこに行けば平和なのかをよく知っている。そういう意味では未熟とは言えない。その感性はすばらしく、大人より、よほど敏感に真実を感じ取つていると言える。

五歳の子どもが、ミサに単独デビューするには、それなりのプロセスがある。

歩けるようになるまでは親に抱かれてゐる。平和な温かい雰囲気の中では、赤ん坊も静かになる。何かを訴える時には泣いたり、動いたりしてサインを出す。その時は、そのサインを読み取って、それにふさわしい対応をすればよい。聖堂の外に出た方がいいと思えば、遠慮なく出ればいい。そして折りを見てまた戻ってくればいい。

動き回るようになると、じつ

としていることは子どもにとって苦痛となる。それでも、いつも動き回るわけではない。自分にとって気持ちよかったり、何かいい感じを得れば、その場にじっとすることが出来る。この教会の聖堂では、ミサの時に子どもがうろうろすると、行く先々で大人が適切に対応する。温かく見守ったり、抱っこしたり、時には子どもといっしょに外に出たりする。自分の子どもでなくても……。

三歳のころになると、親の元を離れることができる。いちばん前の席に來ると、祭壇で行われていることも目につくようになり、興味を示すようになる。自分の周りで起こっていることに關しても、興味を示すようになる。周りの人がしていることをよく観察し、同じ行動をとろうとする。その時その時のコンディションで動くので、時には、その場にふさわしくない行動をとることもある。そのような時は、そばにいる大人がやさしく修正してあげる。叱ったり、脅したり、叩いたりしてはいけない。

大人は子どもがきちんとでき



ないと思ひ込んでいますので、子どもを自分の場から離そうとしない。自分のそばに置いて、きちんと静かにさせようとする。しかし、子どもの視線で見れば、周りは大人ばかりがいて、祭壇で行われていることも見えないし……これでは、子どもにとってミサは苦行にすぎない。祈りなんかとてもできたものではない。

教会の隣に幼稚園がある。一七〇人ほどの子どもが来ている。毎日何度も祈りをする機会がある。子どもたちは祈りの言葉をすぐに暗記してしまう。きれいに十字も切るし、祈りの言葉もはつきりと言うことができる。最近、言葉で祈らない祈りを試みている。沈黙の祈り。沈黙の時間を少しづつ少しづつ長くし

ていく。最近では、三歳、四歳児のクラスで、三分ほどの「祈り」ができるようになった。ある時、祈りの後で一人の子が言った。「天国ってどこにあるんかねえ」。別の子が答えた。「どこか遠いところにあるみたい」。他の子が言った。「違うよ。天国ってここにあるんよ」。別の日。沈黙の祈りの後の感想。「あー気持ちよかった」。「なんか泣きたくなっちゃった」。「うれしいよ」。

ミサや説教の時間が長いと不平を言う大人がいる。そのようなミサは、えてして形式的なものであったり、マンネリ化したものであったりする。心の伴わない冷たいミサ。義務を果たすためのだけのミサ。このようなミサで子どもたちが祈れるはずがない。ミサが長いと子どもたちは我慢できないと思ひ込んでいる大人たちがいる。永遠の世界に入ることでできる子どもたちは、時間に左右されずに、ずっと祈り続けることができるのではないか、とふと思うことがある。次はどの子がデビューするか……楽しみでならない。



株式会社吉本洋紙店

本店 〒104-0041 東京都中央区新富2-7-4

厚木支店 〒243-0807 神奈川県厚木市金田1017

☎03(3551)4141代/2143 FAX03(3551)3939

☎046(223)6931

FAX046(223)6930